

# ツクツク法師

夢野久作

青空文庫



むかしあるところに一人の欲ばりの坊さんがおりました。

毎日毎日方々へお経を読みに行つて貰つて来たお金を一つの大きな甕かめの中に溜めていましたが、だんだん一パイになつてくるにつれて泥棒に取られそうなので怖くてたまらなくなりまして、或る晩のこと小僧にも誰にも知れないようにお庭の隅に埋め、その上に檜の木を一本植えました。

「檜の木よ檜の木よ、お前にそのお金はやるから大切に番をするんだぞ」

こう言つてきかせると、坊さんは手や足を洗つて鍬を片づけて寝てしまいました。

あくる日からその檜の木はずんずん大きくなりましたが、不思議なことには夜になると風が吹くたんびに、その檜の木の葉の間でチャランチャランとお金のぶつかる音がします。坊さんはよろこんで、

「あの檜の木は感心だ。每晚人が寝てしまつてからお金が減らないように数えているのだな」

と思つていました。

しかしその音をきいた村の人はそう思いませんでした。

「あのお寺では夜になるとお金を数える音がする。あのケチンボの坊さんがドツサリお金を溜めているのに違いない」

と皆言い合っておりました。

ところがある年のこと、その近所の村々で雨が降らないためにお米がちつとも出来なくて百姓が大変に困ったことがありました。

村の人々は申し合わせてお寺へ来て、

「和尚さん、すみませんが貴方のお金を貸して戴けますまいか。それでお米を買ってみんなたべますから。その代り来年はきつとお米を作ってあなたにたくさん上げますから」

と手を合わせて拝みながら頼みました。しかし坊さんは知らぬ顔をしてこう言いました。「それは困りましたね。私のところにはお金は一文ありませんよ。あるなら探して御覧なさい」

これをきいた村の人は大変に怒りました。

「あなたは坊さんの癖に嘘をついてはいけません。あんなに毎晩毎晩お金を数えていながら一文もない筈はありません。みんな御飯がいただけで死にそうになっているのに、そんな意地のわるいことを言うのならひどい目に合わせますぞ」

しかし坊さんはちつとも驚きませんでした。

「ひどい目に合わせるなら合わせる。お金は本当にないのだから」

村の人たちはこれを聞くとみんな憤おこつて家中を探しましたが、成る程、坊さんの言う通り何処を探してもお金は一文もありません。

しかたがないのでみんな坊さんにあやまって、うちへ帰ってしまいました。

ところがどうでしょう。

夜になると、やっぱりチャランチャランと言う音が風につれて近所の村中へきこえて来ます。

これをきくと村の中でも力の強い意地のわるい人たちが五、六人寄つてこんな話をしました。

「あの坊主はお金がないなんてウソばかりついている。夜になるとあんなにお金の音がチャラチャラ言っているのに一文もない筈はない。大勢の人たちがお米がたべられないで困っているのに自分ばかりお金をためて知らん顔をしているなんてわるい奴だ。一つお前たちと一緒に泥棒に化けて行つて、あの坊主をおどかしてお金を取り上げて、みんなにわけてやろうじゃないか」

「それがいい、それがいい」

と言うので、村の若い人たち五、六人は黒い布で顔をかくして鎌や鉈なたを持って、すぐにお寺に押しかけて行きました。

お寺に入った泥棒たちは寝ていた坊さんを引きずり起こして、

「さあ坊主、たつた今勘定していたお金を出せ。出さないとたたき殺すぞ」

と言いました。

「勘弁して下さい。お金は一文もありません」

と坊さんはふるえながら申しました。しかし泥棒たちは承知しません。

「こん畜生、又嘘を吐く。お金がないのに何で音がするんだ。さあ出せ。早く出せ」

と言っているうちにお庭の方に風が吹いて、チャランチャランと言う音がしました。

「あッ。お金はあそこにある」

と一人が樫の木の方へ駆け出しますと、みんなあとからつづいて駆け行きました。

これを見た坊さんは肝きもを潰つぶして思わず、

「アッ。そっちにはお金はありません、ありません」

と言いながらあとからかけて来ました。

一人の若い者はふり返って睨みつけました。

「ソレ見ろ。こっちなければほかのところにあるのだろう。こんちくしよう、早く言え」と言うなり坊さんを押えつけて鉋をふり上げました。

「ぶち殺せ、ぶち殺せ」

とほかのものも鎌や棒をふり上げました。

坊さんはしかたなしにとうとうほんとのことを言いました。

「助けて下さい、助けて下さい。本当のことを申します、本当のことを申します。この檜の木の下に埋めてあるのです。ウソだと思ふなら掘って御覧なさい。その代り、どうぞ半分だけで勘弁して下さい」

「この糞坊主、まだそんなことを言う。半分もクソもあるものか。生命だけは助けてやるからジツとしている」

と言いながら坊さんを檜の根方へ縛りつけてしまいました。

坊さんを檜の木へ縛りつけると、泥棒たちはみんな横の方からその檜の根へ大きな穴を掘り始めましたが、成る程、だんだん穴が深くなると下の方から大きな甕が出て来ました。

「オイ大きな甕があるぞ。この中にその坊主はお金を隠しているのに違いない」

「さようです、さようです」

と坊さんは泣き顔をしながら言いました。

「それを半分だけ上げますから早く私を許して下さい」

「ウン、こんなに沢山あれば半分でいい」

と言いながら、坊さんの縄を解いてやりました。

「さあ見ていろ。この甕をタタキ割るから」

といううちに二、三人が鍬のあたままで甕の横腹を無茶苦茶にタタキ割りました。

見ると中には檜の根がパイになっていて、お金は一文もありませんでした。

これを見た坊さんは泣き出しました。

「ああ、私がるう御座いました。その檜の木を植える時に、お前にやるからすっかり番をしろと言ったのを檜の木が本当にして、すっかり根を入れてお金を吸い上げてしまったのです。ですから風が吹くとあんなにお金の音がしたのです。ああ情けない。私はもう本当一文なしになった。許して下さい、許して下さい」

と泣きながらあやまりました。

けれども坊さんに幾度もだまされた人々は、この坊さんの言葉を本当にしませんでした。「この糞坊主のウソ坊主、まだおれたちを欺だまそうとする」

「憎い奴だ」

「殺せ、殺せ」

と云ううちに寄つてたかつてたたき殺して、割れた甕の中へ押し込んで、土をかぶせてしまいました。

ところが又不思議なことには、その晩からいくら風が吹いてもその櫛の木の葉の間にはちつともお金の音がきこえなくなりました。

その代りにその土の下から小さな蟬が何足も何足もびき這い出して来て、その櫛の木に掴まつて、夜が明けてから日の暮れるまで

「惜おしい、ツクツク

惜しい、惜しい

ツクツク、オシイ

ツクツク、オシイ」

と悲しそうに鳴いていました。

村の人々はこの蟬をツクツク法師と名をつけました。あの坊さんはお金が惜しさにあんな虫に生まれかわって、あの櫛の木につかまって「惜しい、惜しい」と泣いているのだと言い伝えました。

# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」三一書房

1970（昭和45）年1月31日第1版第1刷発行

1992（平成4）年2月29日第1版第12刷発行

初出：「九州日報」

1925（大正14）年9月4～6日

※底本の解題によれば、初出時の署名は「香俱土三鳥」です。

入力：川山隆

校正：土屋隆

2007年7月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ツクツク法師

夢野久作

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>